



書評同人
苅部 直
Tadashi Karube
平松洋子
Yoko Hiramatsu
山内昌之
Masayuki Yamauchi

一流の組織経験者に学ぶグローバル思考。

異なる分野で活躍する二人の自伝を交えたユニークな時論の書である。

私立大学のなかで、いまいちばん輝いている大学の一つは明治大学であろう。

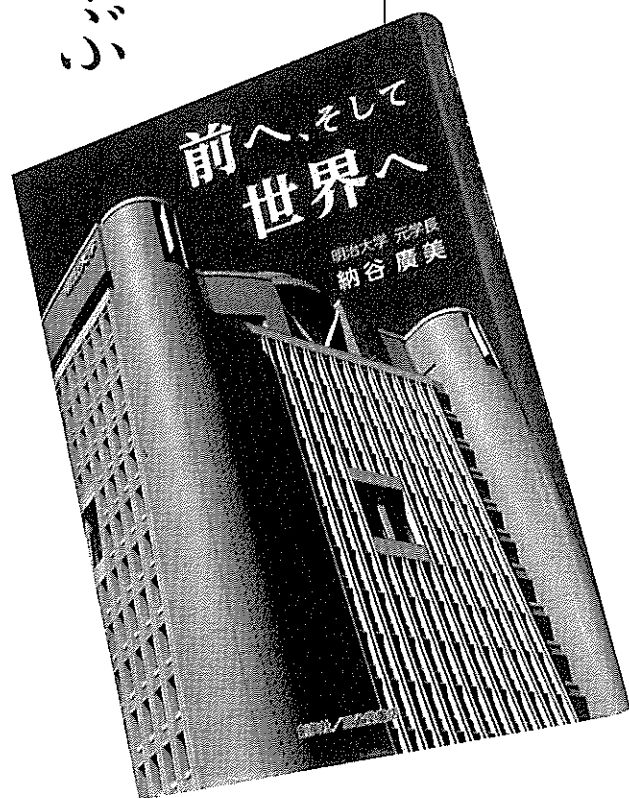
高校生や予備校生、親たちもよく見ているのだ。大学受験志願者数日本一をもちつつ明治大学は、就職率の高さだけでなく、新学部を設置や国際発信へのこだわりでも日本社会で堅実な地歩を固めつつある。その牽引車にしてリーダーは、あくまでも謙虚ながら、持てる理想と抱負を新著で明らかにした。納谷廣美「前へ、そして世界へ」は、故北島忠治ラゲ

ビー部監督の標語「前へ」と、二十一世紀型教育と研究の中核となる「世界へ」を合わせたタイトルにふさわしい好著である。

国立大学だけで育った学者には、私立大学とくに理工系や医薬系の学部経営にどれほどの経費と労力を必要とするかを想像できない人も多い。そもそも経営という問題意識がないのだ。私学の雄、明治大学は理工学部や農学部といった伝統的な理系教育にこれまで貢献してきただけではない。二〇一三年に総合教理学部という数学を専門的軸としたユニークな学

舎を創設した。また、文系学部の学生の授業が多いリバイタワーが、駿河台の通りを圧する威容を知らない人は少ないだろう。明治大学の変革と新世紀に向けた発展にいちばん貢献した人物こそ、法学者の納谷廣美氏なのである。

明治大学が東大や早慶と違う大学になるために、数学と物理との間に現象教理という新しい領域をつくって、「個を強くする大学」にしたのも氏の決断に負うところが大きい。とても民事訴訟法の専門家とは思えぬ理系的発想の大胆さ、学長任期八年をかけた総合大学経営の実績



前へ、そして世界へ
納谷廣美
創英社、三省堂書店/1620円

山内昌之
東京大学名誉教授・国際関係史

と社会からの信頼など、納谷氏は優秀な学者としてだけでなく、大学のリーダーとしてもまぶしい存在なのである。

氏の奥床しい人柄や学問への謙虚さは、ご両親への感謝と尊敬の念、明治と東大の恩師に対する学恩と敬愛の表現など、すべての面に貫かれている。私は、旭川で生まれ育った氏を慈しんだご両親の写真二葉が巻頭に掲げられていることに感動した。なんとという人間の素直さと大らかさであるうか。かといって氏は、いたずらに謙遜するだけの人ではない。二期八年におよんだ学長の業績を踏ま

えた自己採点がある。氏は、就任時の状況を前提にすると百点満点以上の改革ができたと率直に語るのである。しかし、トップスクールになるとの夢を考えると、まだ道半ばであり、六十点から七十点ではないかと控えめに採点するのだ。とはいえ、学長として実現すべき課題の実現という観点からすれば八十点だと、自己採点をつけている。著者は、根柢なしに謙謙の美德を發揮する人ではない。むしろ、〈謙虚な自信家〉なのである。大学という官庁や企業と異なる、むずかしい共同体を率いるには、どのような資質や人柄が必要なのかを教えてください。良質な教育書でもある。

黒川清「規制の虜」は、二〇一一年三月十一日の東北地方太平洋沖地震後に国会に設置された事故調査委員会の長たる経験を踏まえた書物である。著者は、日本型組織の弊害や欠陥をあますところなく剔抉している。黒川氏は、政治家や役人だけでなくジャーナリズムの責任を強く追及した。参考人の答弁を黒川委員長はどう考えるか、といった類の質問に辟易とする。氏は、ジャーナリストの本分

は自分で精査し、個人としてどう考えるかを発表して問題提起することではないかと答える。参考人の言うことがおかしいと思うなら、記者なりメディアが感想を書けばよいと正論を吐くのである。

しかし、日本のマスコミは自分で責任をとりたくないで、黒川委員長はかくかくしかじか述べたと、言質をとりたくしと分析するのだ。こういう具合になったのも、日本が異論を言いにくいな国であり、「グループシンク」の国だからだとい

大学だというのは、手厳しいが当たっている。東大医学部を卒業しながらアメリカに出かけてカリフォルニア大学ロサンゼルス校の医学部教授になるが、黒川氏は、「家元」じみた慣習のことで、東大に助教として戻ることになる。定年を待たずに東大を去って、東海大学医学部長になり、また学術会議議長になる一方、普通の学者の行動範囲をはるかに超えた黒川氏の人間性と組織能力は非凡である。

氏は、人生の大きな岐路に立ったとき、人に意見を求めることはあっても、「どうすればいいでしょう」「どんな選択肢があるでしょうか」と答えを求めたこと

はなかったらしい。誰かに答えを聞いた瞬間、「考えない人」になってしまうからだ。何事によらず、自分で考えなければ問題は根本的に解決されず、また同じような問題で悩むことになるからだ。若い人びとには、「人に訊かない、自分で考える」という心意気を持つてほしいというメッセージを送っている。

氏の言うことはすべて肯綮に中ついている。氏の人格と実力の素晴らしさは、本書にも滲み出ている。受験生をかかえる親、ひきこもりの子に苦しむ家族、大学院を出たものの就職がなくて苦悩する若者たちは、本書を読むことで得るものがたくさんあるだろう。

納谷氏と黒川氏は、日本を代表する学者であり、教育者であるだけでなく、一流の組織経営者でもある。二人には、旭川と東京という違う風土に生まれ育ちながら、地域性を超えるスケールの大きさがある。それが二人の少年をグローバル指向に変える原動力になったのだろう。両書と比較しながら読むことで、〈大きな日本人〉を発見する喜びに浸れるのは幸福の極みである。●



規制の虜
グループシンクが日本を滅ぼす
黒川清
講談社/1836円